

外国人の興味・視野の広さを感じ、考えさせられる点が多い。いずれにせよ、雪氷-海洋-大気相互作用というような学際的なテーマに身を置く研究者は、各分野との交流を盛んにして、常に広い視野をもつべく努力すべきだと痛感した。

最後に、今回のシンポジウム参加にあたって国際交流事業の一環として日本気象学会から旅費の援助を頂いたことを感謝します。

(岩崎記)



山元龍三郎著

### 気象異常

—フロン・酸性雨・森林破壊・  
温暖化—

集英社, 1989年7月刊

237頁, 1,500円

今、世界にひろく話題となっている地球の温暖化について説いた本である。

先日、家庭の主婦向けに書いたと著者から手短に御挨拶をいただいた。このことは、けっして、この本が新聞、雑誌、ドキュメントなどのニュースや興味中心に書かれたことを意味しているのではない。地球規模に社会問題化してきたこの重要な問題について、社会のひとりびとりに正しく理解してもらい、自然な姿の地球環境が将来へもうけつがれるようにという著者のひたすらな願いがあることを意味しているように思う。

著者は大気力学、気候変動、台風等の広汎な気象分野でながく教育研究に携わり、また日本気象学会理事長として学術行政の立場でも働いてきた方である。その道の専門家として大気環境が今日騒がれている方向に進みつつあることを憂慮せずにはおられないという気持がこの本の著述となったと察せられる。

地球の温暖化、異常気象等の言葉は、だれかれ関係なく共通の響きをもつありふれた社会用語であるが、そのメカニズムは大変複雑である。大気に働く不確定要素が多く、また、現時点においてその影響がきちんとおさえられていないというのが現状である。したがって、研究者によって、表にあらわれた異常気象に対する根拠についての判断もまちまちである。著者はこのことを「世界

の学者の意見が不幸にして一致していないのは、地球に関するわれわれの理解が十分でないためである」と嘆いている。かような実態を知りつつも、著者は、地球の温暖化は確実に進行していると警告している。そして、これが地球の自然環境、社会環境にどう影響してくるか、どうすれば予測でき、どう対策すればよいか、等々について専門家の目ととらえ、これをわかりやすい筆致で解説してくれている。

異常気象、地球環境、等に関する現象事例的な本はこれまで多く出版されているが、これらの報告類のものには見られないものがこの本にはある。それは、温暖化の物理機構を明瞭にし、精密に定量化し、そして大気環境が悪化しないように指向していこうという温かい呼びかけがある。この問題を自然科学の対象として真剣に取り組もうと思う方にもこれは立派な指導書であり、またこの話題に対する総合的な知識を常識とし、とりあえずもっておきたいという方にも好適な読本である。一読をおすすめしたい。

この本は、シナリオがはっきりしており、これが1本の映画をみるように現象理解を助けてくれる。ちなみに、本書の構成は、

第1章 プロローグ (1988年の異常気象など)

第2章 地球に何が起きているか

第3章 地球を取り巻く環境からの警告

第4章 環境保全への取り組み

第5章 懸念される地球の動向

第6章 エピローグ (環境破壊の代償など)

のようになっている。そのいずれかの章で、フロン、酸性雨、オゾンホール、森林破壊、砂漠の拡大等々の一般人には耳新しい現象がとりあげられている。

(琉球大学短期大学部・石島 英)